

恋衣

山川登美子・増田雅子・與謝野晶子

青空文庫

詩人薄田泣菫の君に捧げまつる

絵
画
目
次

詩目次

白百合

みをつくし

曙染

君死に給ふこと勿れ

恋ふるとて

いかが語らむ

鼓い
だけ
ば

しら
玉の

冥府
のく
ら戸
は

白百合

山川登美子

髪ながき少女とうまれしろ百合に額^{ぬか}は伏せつつ君をこそ思へ

聖壇^{せいだん}にこのうらわかき儀^{にへ}を見よしばしは燭^{しよく}を百^{ひやく}にもまさむ

そは夢かあらずまぼろし目をとちて色うつくしき靄にまかれぬ

日を経なばいかにかならむこの思たまひし草もいま蕾なり

射あつべし射あてじとても矢はつがへ金^{きん}の桂^{けい}に額^{ぬか}まける君

恋せじと書かせたまふか琴にしてともにと植ゑし桐のおち葉に

こがね雲ただに二人をこめて捲けなかのへだてを神もゆるさじ

手もふれぬ琴柱ことぢたふれてうらめしき音をたてわたる秋の夕かぜ

何といふところか知らず思ひ入れば君に逢ふ道うつくしきかな

このもだえ行きて夕のあら海のうしほに語りやがて帰らじ

この塚のぬしを語るな名を問ふただすみれぐさひとむら植ゑませ

紅べにの花朝々つむにかずつきず待つと百日もゝかをなぐさめ居らむ

ひとすぢを千金せんきんに買ふ王わうもあれ七尺みどり秋のおち髪

わが息^{いき}を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息^{いき}に切る

またの世は魔神^{まがみ}の右手の鞭うばひ美しくしき恋みながら打たむ

袖たてて掩ひたまふな罪ぞ君つひのさだめを早うけて行かむ

うつつなく消えても行かむわかき子のもだえのはての歌ききたまへ

わすれじなわすれたまはじさはいへど常のさびしき道ゆかむ身か

われゆゑに泣かせまつりぬゆるしませよわき少女にいま秋のかぜ

わが胸のみだれやすきに針もあてずましろききぬをかつきて泣きぬ

狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風にむかはむ

裾きえて^{ずる}蔬のまなかに立つと見ぬ^{あめ}天の香をもつ^{ゆりばな}百合花のうへ

うるはしき神の旅路と答^{いら}へまつりともづな解かむ波のまにまに

をみなへしをとこへし唯うらぶれて恨みあへるを京の秋に見し

(明治三十三年の秋)

にほひもれて人のもどきのわづらはし袖におほひていだく白百合

さらば君氷にさける花の室^{むろ}恋なき恋をうるはしと云へ

その涙のごひやらむとのたまひしとばかりまでは語り得れども

その浜のゆふ松かぜをしのび泣く扇もつ子に秋問ひますな

狂ふ子に狂へる馬の綱あたへ狂へる人に鞭とらしめむ

薄月に君が名を呼ぶ清水かけ小百合ゆすれてしら露ちりぬ

とことはに覺むなと蝶のささやきし花野の夢のなつかしきかな

聴きたまへ神にゆづらぬやは胸にくしきひびきの我を語れる

手づくりのいちごよ君にふくませむわがさす紅^{べに}の色に似たれば

里の夜を姉にも云はでねむの花君みむ道に歌むすびきぬ

紅梅にあわ雪とくる朝のかどわが前髪ぬれにけるかな

なにとなく琴のしらべもかきみだれ人はづかしく成れる頃かな

心なく摘みし草の名やさしみて誰におくると友のゑまひぬ

われ病みぬふたりが恋ふる君ゆゑに姉をねたむと身をはかなむと

髪あげて挿^ささむと云ひし白ばらものこらずちりぬ病める枕に

野に出でてさゆりの露を吸ひてみぬかれし血のけの胸にわくやと

世は下^{した}にいかにも強ひようるはしき日知らで土鼠^{もぐら}土を掘るごと

ぬる蝶のなさけやさしみ瓜畑のあだなる花もひとめぐりしぬ

雲きれて星はながれぬおもふこと神にいのれる夕ぐれの空

かがやかに燭^{しよく}よびたまふ夜の牡丹^よねたむ一人^{ひとり}のうらわかきかな

かずかずの玉の小琴をたまはりぬいざうちよりて神をたたへむ
初に)

(新詩社をむすび給へる

指の環を土になげうちほゝゑみし涙の面のうつくしきかな

うるはしきマリヤを母とよびならひわかき尼ずみ寺に年へぬ

誰がために摘めりともなし百合の花聖書にのせて焼りてやまむ

くちなはの口や狐のまなざしや地のうへ二尺君は寵^{ちやう}の子

よわき子は天^{あめ}さす指も毒に病む榮^{さか}えを祝へ地なる醜^{しこづき}草

いもうとの憂^{うき}髪^{がみ}かざる百合を見よ風にやつれし露にやつれし
(晶子の君に)

垣づたひ萩のしたゆくいささ水にはぢらふ頬をばひたしぬるかな

うけられぬ人の御^み文^{ふみ}をなげぬれば沈まず浮かず藻にからまりぬ

くちぶえに小^こ羊^{ひつじ}よびて鞭^{むち}ふりて牧^{まき}場^ばに成りし歌のふしとる

木屋街は火^ほかげ祇園は花のかげ小雨に暮るゝ京やはらかき

世のかぜはうす肌さむしあはれ君み袖のかげをとほにかしませ

利^と鎌^{がま}もて刈らるともよし君が背の小草のかずにせめてにほはむ

いろふかくゑまひこぼるるこの花よたまひし人によく似たるかな

わが舞へる扇の風に殿とのの火を百もの牡丹のゆらぎぬと見る

いかならむ遠きむくいかにくしみか生れて幸さちに折らむ指なき
 がらへてよめる）
 （以下十首人に別れ生きな

地にひとり泉は涸れて花ちりてすさぶ園生に何まもる吾

虹もまた消えゆくものかわがためにこの地この空恋は残るに

君は空にさらば磯回いそわの潮とならむ月に干ひて往ぬ道もあるべき

待つにあらず待たぬにあらぬ夕かげに人の御車みくるまただなつかしむ

今の我に世なく神なくほとけなし運命さだめするどき斧ふるひ来よ

燃えてくかすれて消えて闇に入るその夕榮^{ゆふばえ}に似たらずや君

帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千夜^{ちよ}も御墓の石いだかまし

おもひ出づな恨に死なむ鞭の傷秘^{きず}めよと袖の少女^{をとめ}に長き

夕庭のいづこに立ちてたづぬべき葡萄つむ手に歌ありし君（以上）

みてづからひと葉つみませこのすみれ君おもひでのなさけこもれり

花さかばふたりかざしにさして見むこのすみれぐさ色はうつらじ

あたらしくひらきましたる詩の道に君が名讃^{たぐ}へ死なむとぞ思ふ

わが手もて摘みてかざせるひと花も君に問はれて面染め^{おも}にけり

いづこ踏みいかに歸らむちる花は山をうづみぬ我をめぐりぬ

誰がためにつくる花環とほほゑみて花の名をさへ問ひたまふかな

手づくりの葡萄の酒を君に強ひ都の歌を乞ひまつるかな

迎へ待つ君は来まさずわが駒に百合の花のせ綱ひく夕野

ほほゑみて火焰^{ほのほ}も踏まむ矢も受けむ安きねむりの二人^{ふたり}いざ見よ

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ
 て）
 （晶子の君と住の江に遊び

羽子はごよ毬まりよみな母君にかくされて肩かた上あげあとの針目はりめさびしき

くれなゐに金糸の襟の舞の子を三月みつき画にすと京にある君

紅筆べにふでにわづらひたまふ歌よりも雪の兔に目をたまへ君

見じ聞かじさてはたのまじあこがれじ秋ふく風に秋たつ虹に

きぬでまりましろきなりに春のきてかがる色いろいと糸いとみなもつれたり

たてかけし琴の緒ひくくひびきたり御袖のはしも触れじと思ふに

てずさびにつなぎし路のいと柳誰れその上をまたむすびたる

ちる花に小雨ふる日の風ぬるしこの夕暮ことぢよ琴柱はづさむ

春さむし紅き蕾の枝づたひ病むうぐひすの戸にきより啼く

瞳ひとみまだ栄はえに酔はすな春の雲と袖もておほふ雛のうぐひす

夕顔に片頬あたへしおごりびと妬たしと星も今ちかう降れ

飢ゑていま血なきに筆もちからなし人よ魔と書く文字ををしへね

みいくさの艦ふねの帆いかりづなに錨いかりづなに召せや千すぢの魔もからむ髪

ふる鏡霜に裂けたるこだまなし夜よがらす烏むせび黄泉よみにや帰る

かたつぶりひさしに出でし雨ふつ日瓦にさきぬなでしこの花

たもち得ぬ才はたとへばうまぎけの破れし甕かめにも似たるこの人

ましら羽の鳥に唧ぶくます花ひとつ武蔵のあなた十里におちよ
ひまつりて）
（上総なる林のぶ子の君を懷

髪なでて鏡ゆかしむ夜もありぬ夢にや摘まむしろ百合の花

わが袖も春のひかりの帰らじや牡丹き剪きらせて鼓つづみに添そへば

雲に見る秋のうれひを葉に染めて泣くにしのぶに陰よき芭蕉

扇あやなす彩羽あやはの孔雀鳥の王おごりの塵を吹く春のかぜ

大原女おはらめのものうるこゑや京の町ねむりさそひて花に雨ふる

おぼしまの牡丹の花に額ぬかたれて春の真昼をうつつなき人

幸さいちはいま霽もやにうかびぬ夢はまたしづかに降おりて君と会ひにけり

薔薇ばらもゆるなかにしら玉ひびきしてゆらぐと覚ゆわが歌の胸

せめてただ女神めがみの冠かむりしろ百合の花のひとつと光ひかりそへむまで

地にわが影空そらに愁の雲のかげ鳩とびよいづこへ秋の日往ぬる

虹の輪そらの空にながきをたぐりませ捲かれて往なむこの二人ふたりなり

戸によりてうらみ泣く夜のやつれ髪この子が秋を詩に問ふや誰

歌あらば海ゆく雨に添へたまへ山に夕虹なびくを待たむ
（上総の浜辺に夏を過ぐせるま

さ子の君に)

夕潮に玉藻たまもよる音ねの秋ほそしばかりをだに命なる歌

髪ながうなびけて雲はそぞろなり入日と風と恋をいどめる

鞭むちび拍子やうしやうやく慣なれて南なん国の牧場まきばの春の草に歌よき

百合牡丹にんの花姫なほ足らずばひじりの恋よ野うばらも枕まけ

しら鳩も今むつまじく肩にきぬ君西びとの歌つつけませ

さりととおさへて胸はしづめたれ夜を疑ひの涙さびしき

思あれば秋は袖うつひと葉にも涙こぼれて夕風き黄なり

いつはりの濁るなみだのかかりなばこの袖たちてまた君を見じ

秋かぜに御粧みけはひどの殿をすの小簾ゆれぬ芙蓉ぞ白き透き影にして

ゆふばえやくれなるにほいむら山あめに天の火が書く君得しわが名

ぬのぎれに瓦つつみて才さいはかる秤はかり器の緒にはのぼされにけり
りける時）

（以下拾式首さることのあ

おとなしく母の膝よりならひ得し心ながらの歌といらへむ

鑄られてはひとつ形のひと色の埴はにわ輪のさまに竈かまど出でむか

ひとりにはあまりさびしき秋の夜と筆がさそひしまぼろしよ君

地にあらず歌にただ見るまぼろしの美しくしければ恋とこそ呼べ

書よみて智慧売る子とは生れざり蛇へびのうすぎぬ価ある世よ

いきづけば花とかをらむ思あり人のいのちの燃ゆる胸より

相ふれては花もうなづく浪も鳴る枯木青木からきあをきも山を焼きぬる

おもひでを又はなやぎてかざらばや指さす人に歌ひ興ぜむ

歌よみて罪せられきと光ある今の世を見よ後の千とせに

師と友とわれとし読みてうなづかば足るべき集しうと智者達ちしやに言へ

あなかしこなみだのおくにひそませしいのちはつよき声にいらへぬ

みをつくし

増田まさ子

しら梅の衣にかをると見しまでよ君とは云はじ春の夜の夢

恋やさだめ歌やさだめとわづらひぬおぼろごこの春の夜の人

むつれつつ堇のいひぬ蝶のいひぬ風はねがはじ雨に幸あらむ

飛ぶ鳥かわがあこがれの或るものかひかり野にすと思ふに消えぬ

歌ひとつ君なぐさめむちからなし鬢の毛とりて風にことづてむ

母恋ふる心わすれてあこがれぬやさしおん手のひと花ゆゑに

みやこ人の集のしをりつつみつれどふさひふさふや楓のわか葉

なさけ未だよわきはげしきさだめ分かず酔へりとのみのこの子と知りぬ

かゝる夜の歌に消ぬべき秋人とおもふに淡き裳もふさふかな

世にそむき人にそむきて今宵また相見て泣きぬまぼろしの神

われにまた山の鐘鳴るゆふべなり雫や多き涙や多き

似つかしと思ひしまでよ菖蒲きり池のみぎはを南せし人

あすこむと告げたる姉を門の戸にまちて二日の日も暮れにけり

髪ときて秋の清水にひたらまし燃ゆる思の身にしきるかな

うらみわびこの世に痩せし少女子のひくきしらべをあはれませ君

みふみ得しその夕より黒髪のみだれおぼえて涙ぐましき

痩せ指に小鬢こびんのぬけ毛からめつつさてこの秋にふさふ歌なき

人の名も仏の御名も忘れはて籠に色よき野の花ばなつみぬる

しら梅の朝のしづくに墨すりて君にと書かば姉にくまむか

二十とせは亡き母しのぶ夢にのみ光ほのかにさすと覚えし

わりなくも琴にのぼせて恋得つと御歌みうたのぬしに告げば如何ならむ

つらき世のなさけいのらぬわれなれど夕となれば思あまりぬ

須磨^{すまじと}琴のわかきわが師はめしひなり御胸^{みむね}病むとて指の細りし

ねいき細きこのわがのどに征矢^{そや}ひきて夢路かへさぬ神もいまさば

川くまのふたもと櫟^{いちひ}かげみれば猶も君見ゆわれ遠ざかる

わりなくも君が御歌に秋瘦せてよわき胡蝶の羽^はもうらやみぬ

はかり得ぬ親のこころをかへりみずゆるせと君にものいひてける

わが面^{おも}の母に肖^にるよと人いへばなげし鏡のすてられぬかな

ちる花のしたにかさねてまかせたり君が扇とわが小鼓とこつづみ

紅梅の真垣のあるじ胸をいたみ泣くを隣りに小琴とききぬ

みなさけのあまれる歌をかきいだきわが世の夢は語らじな君

君によき水際みぎはや春の鳥も啼く細き柳は傘にかかりぬ

その御手にほそきかひなをゆるしませくづる浪のはてしなくとも

京の春に桃われゆへるしばらくをよき水ながせまろき山々

夢に見し白き胡蝶の忘れ羽かあらず小百合さゆりのそのひと花か

泣きますな師をなぐさめむすべ知ると小百合つむ君うるはしきかな

(以上二首は登美子

の君に)

つらきかな袖に書いてもまゐらせむ逢はで別るゝ歌のみだれよ

なにとなきとなり垣根の草の名も知らばやゆかし春雨の宿

あづま^ど人が扇に染めし梅の歌それおもひでに春とこそ思へ

この世をもはては我身も咀はるる竹ゆく水に沈む日みれば

袖おほひさびしき笑みの前髪にふさへる花はしら梅の花

うぐひすを春の桜におほはせて水の月さす夏の夜きかむ

山かげの柴戸をもれししはぶきに朝こぼれたりしら梅の花

われ思へば白きかよわの藻の花か秋をかなたの星うけて咲かむ

桃さくらなかくく川の小板橋こいたばし春かぜ吹きぬ傘と袂に

よき里と三とせ御筆みふでのあとに見き今宵虫きくうす月の路
(渋谷にて)

君待たせてわれおくれこし木下路こしたちときのふの蔭の花をながめぬ

花こえてその花をりて垣にそふ夢のゆくへの家うつくしき

初秋はつあきや朝睡あさいの君に御湯みゆまるる花売くるま門かどに待たせて

奇しきもの指につたへて胸に入る神も聞きませ七つの緒琴をこと

こは天^{あめ}か人のさかひかまた逢ひぬ飽かずと泣きてわかれにし君

まれびとに椎の実まゐる山ずみの静なる日や秋の雨ふる

わが袖に掩ひややらむかれ／＼の野^{のばな}花はなれぬ蝶のましろき

わづらひかこれうらぶれか春のうすれ暮うするる夕^{ゆふばえ}栄を見る

みづいろの帯ふさはずやみだれ髪花のしろきに竹の青きに

うつくしき水に小橋に名おはせて里^{みつき}ずみ三月うらわかき人

その神のみすがた知らず御^{みな}名知らず夢はましろの百合の園生に

まぼろしにうつらむものかわがおもひ紅きむらさき色のさま／＼

うたたねの額ひたひにかづく春の袖ぬ繡こひ来牡丹とこがねの蝶と

今はただ歌の子たれと願ふのみうらみじ泣かじおほかたの鞭

うつつなき春のなごりの夕雨にしづれてちりぬむらさきの藤

心とはそれより細き光なり柳がくれに流れにし螢

あゝ君よ心とわれと別れきぬ深山に似たる秋かぜの家

花や雨や野の紫や春のひと酔ひてしばしの夢まどろまむ

海棠の室むろに歌かく春の宵ものあくがれの酒われに濃き

栄^{はえ}とくやもろしと云ふや君よ人よ蝶のむくろに春をうらなへ

このゆふ色なき花にまたも泣くえにしつたなき春のわすれ子

髪あらへば髪に花さき山みづにさくらいぎよふ清滝の里

野の虹のかたへうすれて鐘なりぬ柳にしばしたたずむや誰

奥の院の夕の壁に歌も染めず白き桔梗をたをりて下りぬ^お

おきてたるさとしかしこみ国出づと母の御墓の花に泣く人

ながれゆく汝れよ笹舟しばしまてこの歌染めていのち与へむ

紅蓮^{べにはす}の花船ひとつ歌のせて君ある島へ夕ながさむ

夏くさを一里わけたる君がかど昨日も笑みてただに別れぬ

衾^{ふすま}ぬけて戸をくる京の雪の朝この子が思ひ詩によりみがへる

病む鳥を籠にあはれむ夕ばしら憂かりし春の又も眼に満つ

簾^{すだれ}背に春の眼によき玉おばしま比良のむらさき二尺に足らぬ

おとろへにひとり面瘦せ秋すみぬ山の日うすく銀杏^{いてふ}ちる門^{かど}

わが友の照る頬の春よ淀川のみどりあふれて君が門^{かど}ゆけ
 の友に)
 (以下二首京にありしほど浪華

肩あげによき頬のにはひ君が春を才に耻もつわれ京の姉

ふと倚るに見たるは清き高きまどひその昨日^{きのふ}もつしら梅の花

拍つ手ここに御池^{みいけ}の緋鯉なれつるよ一人^{ひとり}を京の春の子老いな

まぼろしに得たるみすがたたどる眼にいつしか霧の枯野を得たり

わが魂を武蔵やいづこ水よ引け夜^{よる}の二百里花ふらしめよ

御手^{みて}もろともそよ片山のこがらしにまぎれ消ぬべき我ならばとも

おんすくせわかき御尼^{みあま}に泣かれけり堂の夕^{ゆふさむ}寒わが袖まゐる

寒菊に涙さびしき夕別れせつなき別れ西の京にして

わがなれぬ寒さの袖にまたも雪風は愛宕の北のおろしよ

そのおもざし姉に似たるにまた泣きぬ雨のまくらをふた夜の人や
(弟と京にてよめる)

知らざりしほころべば黄に紫にきのふ垣根に名なかりし草

舟にして蓮きる御手の朝うつくし十九を滋賀の水によき君
(友に)

なぐさめむ人なき寮の夜のさくらおなじ愁の君にちるべき

夜の柳ひくき浪華の水なりき歌うて過ぐる君とのみ見し

笛を追ひてゆふべ船やる水一里蓮^{はす}の香のせて櫓にやはらかき

なぐさみぬ都の旅の秋の身も歌に笑む夜は足る人のごと

李^{すも}ちる京の夕かぜ又も泌^しむひととせ見たる美しくしき窓

ゆく春をひとりしづけき思かな花の木^{このま}間に淡^{あは}き富士見ゆ

江戸川のさくら黄ばめる朝靄にわかれし人をえこそ忘れね

春雨に山吹うかぶ細ながれみどりこなたへ君をいざなへ
(東の京より西の京の友へ)

秋の日のこがねにほへる遠木^{とほこだち}立そこにか母のありかたづねむ

磯にして君を思ふに清き夜や歌とは云はじ浪に得し珠
(以下二首上総の海辺にて)

汐あむや瑠璃を斫りたる桂なし海松^{みる}ぶさささと額^{ぬか}ふれにける

とほく行く身にたまはりぬ琵琶だきて秋の雲みる西のみづうみ

この世にはあらずと知りしかたらひをしづかに思ふ森かげの道

春うたふ小鳥追ひ打つ世と知らずあくがれ出でし花の木づたひ
れて)

(以下拾首さることによ

うるはしきゆめみごこちやこのなさけこの歌天あめの母にそむかじ

彼の天あめを知らぬ土鼠もぐらの宮守みやもりにわが歌悪しと憎まれにけり

耳しひしひじりはわかきうぐひすのよき音ねは問はず籠こに閉ぢてのみ

われ咀くひ石のもののいふ世と知りぬつめたき声に心こほりぬ

みなさけかねたみか仇かあざけりかほほゑみあまた我をめぐる

歌はみな天あめのひかりにあこがれぬ母なき国に栖みわびぬれば

わが歌は鵠はとにやや似るつばさなり母ある空へ羽搏はうち帰れと

大神のみまへめぐりて立たむときかしこき人ら今日を忘るな

わきて身にしむやこの秋もみぢ葉のこきひと葉すら咀はれの色

曙染

與謝野晶子

春曙抄しゅんじよせうに伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな

あゝ野の路君みちとわかれて三十歩ほまた見ぬ顔に似る秋の花

ほととぎす聴きたまひしか聴かざりき水のおとするよき寢覚ねぐめかな

海恋し潮しほの遠鳴りかぞへては少女となりし父母ちほの家

加茂川に小舟こぶねもちるる五月雨さつきあめわれと鼓つづみをあやぶみましぬ

鎌倉や御仏みほとけなれど釈迦牟尼びなんは美男におはす夏木立かな

おもはれて今年ことしえうなき舞はこごろも篋こがねに黄金くぎの釘くぎうたせけり

養はるる寺くの庫裏りなる雁がん来らい紅輪こうわ袈裟げさは掛けとで鶏とりおはましを

ほととぎす治承ちしやう寿永じゆえいのおん国母こくも三十きやうにして経きやうよます寺

わが恋は虹にもまして美しきいなづまとこそ似むと願ひぬ

聖せいマリヤ君にまめなるはした女めと壇だんに戒かいえむ日も夢みにし

頬ほよすれば香いる息いきはく石の獅子ふたつ栖むなる夏木立かな

髪さに挿させばかくやくと射る夏の日や王者わうしやの花のこがねひぐるま

紅^{べに}させる人衆^{にんじゆう} おほき祭^{まつり} 街^{まち} きやり唄はむ男と生ひぬ

紅^{あけ}の緒の金鼓^{きんこ}よせぬとさまさばやよく寝^ねる人をにくむ湯の宿

今日^{けふ}のむかし前髪あげぬ十三を画にせし人に罪ありや無し

誰^{たれ}が罪ぞ永劫^{えうがふ}くらきうづしほの中^{なか}にさそひし玉と泣くひと

里ずみの春雨ふれば傘さして君とわが植う海棠の苗

ほととぎす過ぎぬたまゝ王孫^{わうそん}の金^{きん}の鎧を矢すべるものか

さくらちる春のゆふべや廃院^{はいゐん}のあるじ上臈^{じやうらふ}赤裳^{あかも}ひいて来^こ

花のあたりほそき滝する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月

掛け香のけむりひまなき柱をば白き錦につつませにけり

三井寺や葉わか楓の木下みち石も啼くべき青あらしかな

棹さをとりの矢がすり見たる舟ゆゑに浪も立てかししら蓮の池

姉なれば黒き御戸帳まづ上げぬ父まつる日のものの冷たき

更くる夜をいとまたまはぬ君わびず隅にしのびて鼓緒つづみしめぬ

きり／＼す葛の葉つづく草となり笛ふく家と琴ひく家と

蓮はすを斫り菱の実とりし鹽舟たらひぶねその水いかに秋の長雨ながあめ

青雲あをぐもを高吹く風に声ありて讃じたまひし恋にやはあらぬ

斯くは生おひてふりわけ髪かみの世も知らず古りし磬けいうつ深院しんゐんのひと

春日かすがの宮わか葉のなかのむらさきの藤のしたなる石の高麗狗こまいぬ

第一の美女びぢよに月ふれ千人せんじんの姫に星ふれ牡丹饗きやうせむ

このあたり君が肩よりたけあまり草ばな白く飛ぶ秋の鳥

家いへ 鼬いたち 尾おたるる相さうのむかしがほや瓜うりひとめぐり嗅かぎても往いぬる

才さいなさけ似にざるあまたの少女見むわれをためしに引くと聞くゆゑ

わが恋はいさなつく子か鮪釣しびりか沖の舟見て見てたそがれぬ

白きちさき牡丹おちたり憂かる身の柱はなれし別れの時に

星よびて地にさすらはす 洪量こうりやうの人と思ふに批ひもうちがたき

花に見ませ王わうのごともただなかに男をは女めをつつむうるはしき薤しべ

在まさぬ二夜名ふたよしらぬ虫を籠こに飼ひぬ寝がての歌は彼れに聞きませ

耳かして身ほろぶ歌と知りたまへ画ならばただに見てもあるべき

ややひろく廂ひさしだしたる母屋もやづくり木の香にまじるたちばなの花

祭の日 葵あふひばし 橋はし ゆく花がさのなかにも似たる人を見ざりし

精^{せい}好^{がう}の紅^{あけ}としら茶^ちの金^{きん}欄^{らん}のはりまぜ箱^{こつ}に住^ずみし小^こ鼓^{づみ}

杉^しのうへに茅^ち渟^ねの海^{かい}見^みるかつらぎや高^{たか}間^まの山^{やま}に朝^あ立^たちぬ我^{われ}れ

八月^{はつ}や水^{みづ}蘆^{あし}いとうたけのびてわれ喚^{わめ}びかねつ馬^{うま}あらふひと

夕^{ゆふ}かぜの河^か原^{げん}へ出^でづる小^こ棧^{さん}橋^{ばし}いそぎたまふにまへぎし落^おちぬ

眉^{まゆ}つくるちさき鹽^{しほ}に水^{みづ}くみて兎^うあらふを見^みにきまさぬか

今^{けふ}日^ふみちて今日^{けふ}たらひては今日^{けふ}死^しなむ明^あ日^すよ昨^{きの}日^ふよわれに知^しらぬ名^な

木^き曾^{そう}の朝^{あさ}を馬^ま子^ごも御^お主^{しゆう}も少^{せう}女^{によう}笠^{がさ}鞍^{くら}に風^{ふう}ふくあけぼの染^{ぞめ}に

月^{つき}あると同^{どう}車^{しや}いなみしとが負^おひて歌^{うた}おほくよむ夜^よのほととぎす

むらさきの蓮はすに似ませる客まろうど人や荷葉かえふの水に船やりまつる

蚊やりしばし君にゆだねしけぶりゆゑおぼろになりし月夜と云ひぬ

紅べにしほり緋むくなでしこ底くれなる我にくらべて名おほき花や

わが命めいに百合からす羽の色にさきぬ指さすところ星は消ぬべし

夕粧ゆふげはひて暖簾のれんくぐれば大阪の風簷かざしふく街にも生ひぬ

五月晴つゆばれの海のやうなる多摩川や酒屋の旗や黍もろこしのかぜ

高つきの燭しよくは牡丹に近うやれわれを照すは御冠みかむりの珠

欠くる期^ごなき盈^ごつる期あらぬあめつちに在りて老いよと汝^なもつくられぬ
 (秀を生みし時)

たなばたをやりつる後^{のち}の天の川しろうも見えて風する夜かな

蓮^{はす}きると三寸とほき花ゆゑにみぎはの人のさそはれし舟

憂ければぞ爪^{つめ}に紅^{べに}せぬ夕ぐれを色は問はずて衣^{きぬ}もてまゐれ

舟にのれば瓔^{えうらく}珞^{はす}ゆらぐ蓮^{はす}のかぜ掉^{はす}のひとり^{こんりよう}は衰^{はす}竜^{りゆう}の袖

しら蓮^{からき}や唐木^{からき}くみたる庭^{にはぶね}舟^{ちん}に沈^{ちん}たきすてて伯父^{ちん}の影なき

われを問ふやみづからおぐる名を誇る二十四^{とき}時を人をし恋ふる

ここすぎて夕立はしる川むかひ柳^{せんしゆ}千株^{せんしゆ}に夏の雲のぼる

水浴^{みあ}みては溪の星かげ髪ほすと君に小百合の床をねだりし

百合がなかの紅^{べに}百合としものたまふやをかし二人^{ふたり}の君が子の母

誰れが子かわれにをしへし橋納^{はしすゞみ}涼十九の夏の浪華^{なには}風流^{ふうりう}

露の路畑をまがれば君みえず黍^{もろこし}の穂にこほろぎ啼きぬ

鳥と云はず白^{はく}日^{じつ}虹のさす空を飛ばば翅^{はね}ある虫の雌雄^{めを}とも

夏の日の天^{てん}日^{じつ}ひとつわが上^{うへ}にややまばゆかるものと思ひぬ

百^{ひゃく}間^{けん}の大き弥陀堂ひとしきり煙みなぎり京の日くれぬ

夕されば橋なき水の舟ふなよそひ渡らば秋の花につづく戸

母屋もやの方かたへ紅あけ三丈の鈴の綱つな君とひくたび衣きぬもてまゐる

君やわれや夕雲を見る磯のひと四つの素足すあしに海松みるぶさ寄せぬ

里さとずみに老いぬと云ふもいつはりの歌と或る日は笑めりと思せおも

きざはしの玉靴たまぐつ小靴をぐついでまさずば牡丹さうちらむと奏そうさまほしき

恋しき日さもや侍さむらいらひなれし東椽とうえんの隅のはしらにおもかけ立たむ

ほととぎす岩山みちの小笹をさざ二町みやま深山といふにわらひたまひぬ

あやにくに虫齒むしば病む子とこもりゐぬ鼓つづみきこゆる昼の山の湯

君によし撫でて見よとて引かせたり小馬ましろき春の夕庭

花とり／＼野分の朝にもてきたる十人の姿よしと思ひぬ

七たりの美なる人あり簾して船は御料の蓮きりに行く

かしこうて蚊帳に書よむおん方にいくつ摘むべき朝顔の花

ふるさとやわが家君が家草ながし松も楓もひるがほの花

ほととぎす山門のぼる兄のかげ僧服なれば袖しろうして

よき箱と文箱とどめていもうとは玉虫飼ひぬうらみ給ふな

この恋びとをしへられては日記にきも書きぬ百合にさめぬと画蚊ゑがやに寝ぬと

水にさく花のやうなるうすものに白き帯する浪華の子かな

春の池楼ろある船の歩み遅々ちと行くに慣れたるみさぶらひ人

夏花は赤しやく熱ねつ病める子がかざしあらはに歌ひはばからぬ人

伯母をばいまだ髪もさかりになでしをかざせる夏なに汝なれは生れぬ
 子と名をえらみて）
 （弟の子の生れけるに夏

行く春にもとより堪へぬうまれぞと聞かば牡丹に似る身を知らむ

妻と云ふにむしろふさはぬ髪も落ちめやすきほどとなりけるかな

われに遅れ車よりせしその子ゆゑ多く歌ひぬ京の湯の山

夕かぜや羅の袖うすきはらからにたきものしたる椅子ならべけり

わが愛づる小鳥うたふに笑み見せぬ人やとそむき又おもひ出ず

かへし書くふたりの人に文字いづれ多きを知るや春の染紙そめがみ

われぼめや十方じふぱうあかき光明のわれより出でむ期ごするものゆゑ

ふりそでの雪輪ゆきわに雪のけはひすや橋のかなたにかへりみぬ人

かけものゝ牛の子かちし競馬けいばのり梅にいこふをよしと思ひぬ

酒つくる神と注ちうある三尺の鳥居のうへの紅梅の花

われにまさる熱えて病むと云ひたまへあらずとならば君にたがはむ

菜の花のうへに二階の障子見え戸見え伯母見えぬるき水ふむ

あやまちて小櫛ながしゝ水なればくぐるは君が花垣なれば

河こえて鼓凍らぬ夜をほめぬ千鳥なく夜の加茂の里びと

鹿が谷尼は磬うつ椿ちるうぐひす啼きて春の日くれぬ

くれなるの蒲団かさねし山駕籠に母と相乗る朝ざくら路

あゝ胸は君にどよみぬ紀の海を淡路のかたへ潮わしる時

まる山のをとめも比叡の^{だいとこ}大徳も柳のいろにあさみどりして

法華經の朝座^{あさざ}の講師^{かうし}きんらの御袈裟^{みけさ}かをりぬ梅さとちりぬ

いでまして夕むかへむ御轍^{みわだち}にさざん^{くわ}花ちりぬ里あたたかき

歌よまでうたたねしたる^{ぼんにん}犯人は花に立たせて見るべかりけり

うれひのみ笑みはをしへぬ^{とほ}遠びとよ死ねやと思ふ夕もありぬ

御供養^{みくやう}の東寺舞樂^{とうじぶがく}の日を見せて桜ふくなり京の山かぜ

金色^{こんじき}のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

紅梅^{をなこ}や女あるじの零落^{れいちらく}にともなふ鳥の籠かけにけり

大木^{たいぼく}にたえず花さくわが森をともに歩むにふさふと云ひぬ

しろ百合と名まをし君が常夏^{とこなつ}の花さく胸を歌嘆^{かたん}しまつる
(とみ子の君に)

審判^{さはん}の日をゆびきずくるとげにくみ薔薇^{ばら}つまざりし罪とひまさば

山の湯や懸想^{けさう}びとめく髪ながの夜姿^{よなり}をわかき師にかしこみぬ

廊馬道^{らうめどう}いくつか昨夜^{よべ}の国くればうぐひす啼きぬ春のあけぼの

こゝろ懲りぬ御兄^{みあに}なつかしあざみては博士得ませと別れし人も

うへ二枚^{まい}なか着^ぎはだへ着舞扇^ぎはさめる襟の五ついろの襟

きよき子を唾とつくりぬその日より瞳なに見るあきじひの人

人ひと春はる秋あきねたしと見るはただに花衣きぬに縫はれぬ牡丹しら菊

女めさそひし歌の悪あく霊りやう 人生みぬ髪ながければ心しませや

春の夜の火かげあえかに人見せてとれよと云へど神に似たれば

明けむ朝われ愛あい着ちやく 着やく 人よ見な花よ媚ぶなと袋に縫へな

にくき人に柑子かうじまゐりてぬりごめの歌問ふものか朝の春雨

よしと見るもうらやましきもわが昨日きのふよそのおん世は見ねば願はじ

酔ひ寝ては鼠がはしる肩と聞き寒き夜守りもぬ歌びとの妻

手ぢ^たからのよわや^{とあし}十歩に鐘やみて桜^たちるなり山の夜の寺

兼好を語るあたひに伽羅たかむ京の法師の麻の御^みころも

かくて世にけものとならで相逢ひぬ日てる星てるふたりの額^{ぬか}に

春の夜や歌舞伎を知らぬ鄙^びびとの添^そひてあゆみぬあかき灯の街

玉まろき桃の枝^えふく春のかぜ海に入りては真^{しん}珠^{じゆ}生むべき

春いそぐ手毬^{てら}ぬふ日と寺々^ゝに御詠歌^{みえいか}あぐる夜は忘れぬ

春の夜はものぞうつくし怨^{ゑん}ずると尋^{ひろ}のあなたにまろ寝の人

駿河の山百合がうつむく朝がたち霧にてる日を野に髪すきぬ

伽藍すぎ宮をとほりて鹿吹きぬ 伶人めきし奈良の秋かぜ

霜ばしら冬は神さへのろはれぬ日ごと折らるるしろがねの櫛

鬼が栖むひがしの国へ春いなむ除目に洩れし常陸ノ介と

髪ゆふべ孔雀の鳥屋に横雨のそそぐをわぶる乱れと云ひぬ

廊ちかく鼓と寝ねしあだぶしもをかしかりけり春の夜なれば

集のぬしは神にをこたるはした女か花のやうなるおもはれ人か

さは思へ今かなしみの酔ひごこち歌あるほどは弔ひますな

君死にたまふことなかれ

旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて

あゝをとうとよ、君を泣く、

君死にたまふことなかれ、

末に生れし君なれば

親のなさけはまさりしも、

親は刃やいばをにぎらせて

人を殺せとをしへしや、

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

堺さかひの街のあきびとの

旧家きうかをほこるあるじにて

親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとも、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戦ひに
おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
獣^{けもの}の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思^{おも}されむ。

あゝをとくとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾のれんのかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻にひづまを、
君わするるや、思へるや、
十月も添とつきはでわかれたる
少女ごごころを思ひみよ、

この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。

恋ふるとて

恋ふるとて君にはよりぬ、
君はしも恋は知らずも、
恋をただ歌はむすべに
こころ燃え、すがた癩せつる。

いかが語らむ

いかが語らむ、おもふこと、
そはいと長きこゝろなれ、

いま相むかふひとときに
つくしがたなき心なれ。

わが世のかぎり思ふとも、
われさへ知るは難からし、
君はた君がいのちをも
かけて知らむと願はずや。

夢のまどひか、よろこびか、
狂ひごちか、はた熱か、
なべて詞に云ひがたし、
心ただ知れ、ふかき心に。

鼓いだけば

鼓^{つみ}いだけば、うらわかき

姉のこゑこそうかびくれ、

桂^{うちぎ}かづけば、華やぎし

姉のおもこそにほひくれ、

桜^{すだれ}がなかに簾して

宇治の河見るたかどのに、

姉とやどれる春の夜の

まばゆかりしを忘れめや、

もとより君は、ことばらに

うまれ給へば、十四まで、

父のなさけを身に知らず、

家に帰れる五つとせも

わが家ながら心おき、

さては穂に出ぬ初恋や

したに焦るる胸秘めて

おもはぬかたの人に添ひ、
泣く音をだにも憚れば

あえかの人はほほゑみて

うらはかなげにもものいひぬ、

あゝさは夢か、短命たんめいの

二十八にてみまかりし

姉をしのべば、更にまた

そのすぐせこそ泣かれぬれ。

しら玉の

しら玉の清らに透とほる

うるはしきすがたを見れば、

せきあへず涙わしりぬ、

しら玉は常ににほひて

ほこりかに世にもあるかな。

人のなかなるしら玉の

をとめ心は、わりなくも、

ひとりの君に染^そみてより、

命みじかき、いともろき

よろこびにしもまかせはてぬる。

冥府のくら戸は

よみのくら戸はひらかれて

恋びとよよといだきよれ、

かの天^{あめ}に住む八百星^{やほほし}は

かたみに目路^{めぢ}をなげかはせ、

土にかくれし石屑^{いしくづ}は

皆よりあひて玉と凝れ、
わが胸こがす恋の息^{いき}
今つく熱きひと息^{いき}に。

青空文庫情報

底本：「恋衣 名著復刻 詩歌文学館」日本近代文学館

1980（昭和55）年4月1日発行

底本の親本：「恋衣」本郷書院

1905（明治38）年1月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にあらためました。固有名詞も原則として例外とはしませんでした。人名のみは底本のままとしました。

※変体仮名は、通常の仮名にあらためました。

※底本中で脱漏や誤りの可能性がある点については、「與謝野鉄幹・與謝野晶子集 明治文学全集51」筑摩書房、1968（昭和43）年、「與謝野寛 與謝野晶子 窪田空穂 吉井勇 若山牧水集 日本現代文学全集37」講談社、1964（昭和39）年を参照し、補訂しました。

入力：武田秀男

校正：kazuishi

2004年6月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

恋衣

山川登美子・増田雅子・與謝野晶子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>